

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：32514

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381225

研究課題名(和文)音楽の協同性に着目した幼小接続の音楽活動プログラムの実証的研究

研究課題名(英文)An Empirical Study on the Musical Activity Program of Young Small Connection focusing on Cooperativeness of Music

研究代表者

尾見 敦子(Omi, Atsuko)

川村学園女子大学・教育学部・教授

研究者番号：20185672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では音楽の協同性に着目した、幼小接続の音楽活動プログラムの創出を目的とした。音楽による人間教育の系譜をもつ諸外国の実践・研究資料を収集し、幼小接続期の音楽教育理念、音楽指導の特徴、4か国のナショナル・カリキュラムの共通点・相違点を明らかにした。ベテランの保育者の中に経験的に構築されたわらべうたのカリキュラムや教授法を明らかにし、保育者、小学校教師、養成校の音楽教員を対象とした講習会を実施し、発達の見方、発達に適った教材と指導法の共有を図った。この知見を活かし、わらべうたを中心とした総合的な「表現」活動と、ピアノ演奏の「鑑賞」活動から成る音楽プログラムを創出した。

研究成果の概要(英文)：In this research, we aimed at creating a music activity program of childhood connection focusing on music cooperativeness. (1) We gathered practical and research materials from foreign countries. (2) We clarified the common points and differences of the musical education philosophy of the early childhood connection, the characteristics of musical instruction and the national curriculum of the four countries. (3) We clarified the curriculum and teaching method of the singing games empirically constructed among the veteran teachers. (4) We conducted a workshop for early childhood educators, elementary school teachers, and music teachers at teacher training college. We tried to share appropriate teaching materials and teaching methods suitable for children's development. (5) Making use of this knowledge, we have created a music program consisting of comprehensive expression activities focused on singing games and music appreciation activities of piano performance.

研究分野：音楽教育学

キーワード：幼小接続 音楽の協同性 音楽活動プログラム

1. 研究開始当初の背景

「幼小」の音楽教育の連続性と系統性が必要である、という主張はこれまであまりなされてこなかった。日本の幼稚園教育要領では音楽は、「表現」領域でわずかに言及されているだけである。「表現」領域には、音楽の語法や形式に拠らず、子どもが「自分なりに表現」することで感性、表現力、想像性が育つ、と書かれている。はたしてそうであろうか。また「自分なりに表現」することがゴールであるとしたら、それはどこに向かうのか。小学校の音楽教育とどう繋がるのか。

幼児期は「他者と関わって遊ぶ」ことを通して「社会性」を大きく発達させていく時期である。したがって、人とかかわる楽しさをもたらす「音楽の協同性」に着目した活動を積極的に取り入れるべきではないか。ともあれ、アウトプット（自己表現）が豊かになるにはインプットが必要である。つまり「音楽の協同性」を活かした「幼小接続」の具体的なプログラムの開発が必要であると考えた。

2. 研究の目的

(1) 音楽による人間教育の系譜をもつ諸外国の実践・研究資料の収集：諸外国の音楽教育における幼小接続の状況を調査する。

(2) 研究資料の分析と検討：諸外国の幼小接続期の音楽教育理念、音楽指導の特徴、ナショナル・カリキュラムとの関係、調査した国々のナショナル・カリキュラムの比較をもとに共通点・相違点を明らかにする。

(3) 我が国における「音楽の協同性」「幼小接続」の意図を合わせもつ好事例の収集：諸外国の動向と比較検討し、音楽の協同性に着目した幼小接続の音楽活動プログラムの研究実践の原則を得る。

(4) 保育者、小学校教師、養成校の音楽教員を対象とした講習会の企画と実施：「音楽の協同性」に着目した「幼小接続」の音楽教育の重要性を理解し、実践できるためのスキル（発達の見方、発達に適った教材と指導法）

を獲得できる講習会を創出し、受講者のフィードバックを得て前進させる。

(5) 講習会で提示した内容の実践的検討：日本の幼小接続期（幼児～小学校低学年）の一般的な状況において音楽の協同性の喜びを得られる必要条件を探る。歌遊び以外の音楽活動（身体表現や音楽鑑賞）における「音楽の協同性」の実現可能性を実践的に探る。

3. 研究の方法

(1) 初年度の8月から次年度の8月にかけて、音楽活動プログラムの開発のための基礎研究として、アメリカ（小川）、ハンガリー（全員）、フィンランド（尾見、永岡、阿波）、ドイツ（尾見、井下）、トルコ、ポーランド（小川）を訪問した。調査と資料収集の柱は、①就学前教育（幼稚園・保育園）の音楽指導と小学校低学年の音楽授業の参観、および指導者へのインタビュー ②就学前教育・初等教育の教員養成に携わる音楽教育担当教員へのインタビュー ③現地の音楽教科書や指導書、教材集や音楽教育関係図書視聴覚資料の収集 であった。

(2) 海外で収集した研究資料の整理、分析を行った。録画した音楽活動・音楽授業の映像を起こして文字化し、必要箇所を詳細に分析した。現地で入手したCDや楽譜と突き合わせ、教材分析を行った。ナショナル・カリキュラムはインターネットからダウンロードし、幼児教育と義務教育を中心に、音楽の教育理念と教育内容を抽出し、必要箇所を翻訳した。ハンガリー（尾見）、フィンランド（阿波）、ドイツ（井下）、アメリカ（小川）の4か国のナショナル・カリキュラム（注。アメリカは、芸術教育領域の教員組織によるナショナル・スタンダードである）の検討結果を持ち寄り、データの共有と比較検討を行った。

(3) 「幼小接続」の問題意識をもち、「音楽の協同性」という特性を積極的に活用してわ

らべうたの実践を長年実践してきた2人の園長（榎田、篠崎）から提供を受けた、保育者と子ども、子ども同士のわらべうた遊びにおける、各年齢段階の音楽行動の映像を分析し、両氏からの聞き取りを行い、わらべうたで子どもが育っていく筋道や、ベテランの保育者の中に経験的に構築されたわらべうたのカリキュラムや教授法を明らかにすることを試みた。

(4) 講習会の延べ時間、回数、内容の構成、広報の仕方等を、実技講師を交えて検討する一方、(3)で得られた知見を基に、0歳から6歳までの発達段階に沿った遊びの系統の資料化を進めた。それぞれの専門分野から講習会に何が提供できるかを検討した。アンケート調査により、講習会の前後の保育者の意識の変容、わらべうたに対する感性の高まりを調査することとした。

(5) 研究代表者ら（尾見、長谷川）は、月1回、3～5歳児を対象に、「子どもにとって「楽習」体験となるような、聴取、歌唱、動き、楽器、鑑賞をバランスよく組み合わせた音楽活動を定期的、継続的に（5月～2月）提供し、音楽的な伸長を図るとともに、音楽的能力の伸長が「就学までの育ち」にどのように関わるかについて考察を行った。横断的研究実践として、2月から3月にかけて、小学校第1学年に1回、第2学年に3回、各2クラスに「わらべうたによる」音楽指導を行った。これにより、就学前の「わらべうたを通じた音楽指導」からの「接続」と発展のありかたを検討した。

4. 研究成果

(1) 初年度の9月までに得た研究資料をもとに、アメリカ、フィンランド、ハンガリーの現状比較報告を行った（尾見・小川・永岡2014）。各国に共通していたのは、「音楽の教育」を通じた「人間教育」、すなわち、音楽教育は音楽的能力のみならず人格形成の諸

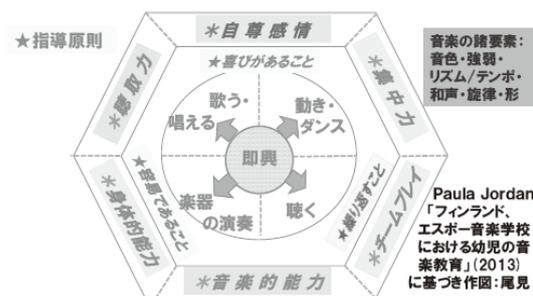
側面の発達に寄与するという理念であった。ハンガリーの幼児の音楽教育の専門家、ディートリヒ・ヘルガは太陽の模式図（下図）でこの理念を表している（尾見2015, p. 51.）。



図1 音楽が子どもの人格に及ぼす教育力（ディートリヒ・ヘルガ）（訳出：尾見敦子）

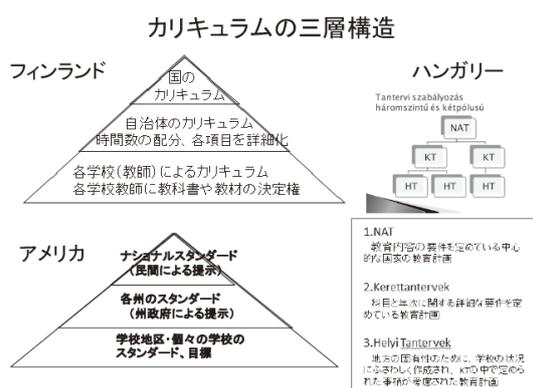
ハンガリーでは5歳児（幼稚園）は義務教育であり、幼児教育の現場は「幼小接続」への高い意識を持っていた。また、小学校入学時の音楽授業が幼稚園教育を土台にしており、「音楽教育における幼小接続」の実現がめざされていることが窺えた。

(2) ハンガリーに関しては、幼稚園におけるわらべうたを通じた音楽指導(2014年9月)の詳細な分析（尾見2015）、半年後（2015年3月）との比較と小学校入学直後のわらべうたによる音楽授業の実際（尾見2017）を報告した。フィンランドに関しては、エスポー音楽学校による保育園への音楽教師派遣システム、音楽学校における「音楽プレイスクール」の3つの指導事例（2015年3月）の分析と特徴の抽出、「音楽プレイスクール」のカリキュラム(1～6歳)を報告した(永岡2015)。エスポー音楽学校における音楽指導では即興を重視し、各音楽活動がバランスよく関係づけられ、音楽の教育力が自尊感情、集中力、チームプレイに及ぶことが窺える（下図）。



ドイツに関しては、ノルトライン・ヴェストファーレン州ノイス市の音楽学校が市内全小学校で展開している「全ての子どもが自分の声で」プロジェクトの概要、人間形成におよぼす音楽の教育力への強い信念に基づくシステム、その実践内容を報告した（井下・尾見 2015）。諸外国の幼小接続期の音楽教育諸実践を分析すると、集団での歌遊びや音楽による身体表現遊びの活動形態を中心とし、歌唱・動き・言葉・楽器を組み合わせ、子どもたちの能動的参加を促す音楽的な働きかけによって幼小接続期の発達段階に適った、継続的で積極的な音楽教育が意図されていることに気づく。

4 か国のナショナル・カリキュラムの比較を通して「カリキュラムの三層構造」が明らかになった（下図）。



国と現場を繋ぐ中間カリキュラムの存在が学校と教師の自主性・自立性（カリキュラムや教材の選択の自由）を保証すると同時に教育の質とレベルを確保する重要な役割を果たしていると思われる（小川他 5 名 2015）。

（3）わらべうたが子どもの音楽的成長のみならず、言語、感情、美的感性、社会性などの発達に寄与するゆえに、わらべうたの実践を通して就学前の子どもを育ちを支えようという趣旨で、学会の自主シンポジウムを行った（尾見他 4 名 2016）。篠崎は、わらべうたは大人と子どもの「愛着関係」を身体感覚に刻むこと、その中で育った「共感能力」が「仲間意識」の助けとなることを述べた。榎

田は、3 歳児は「しぐさ遊び」を通して《一緒感》を知り、同時に《違う》ことにも気づくこと、4 歳児は「役交代遊び」や「門くぐり遊び」を通して、役を担ったり、その他大勢になったりすることを経験すること、5 歳児は「しぐさ・役交代の複合遊び」を通して《皆が揃う》喜びを味わい、力を合わせることを体験し、《ルール》に従って「順番」「交代」「リーダーシップとフォロワーシップ」を体験することを述べた。このように誕生から就学に至るまでの子どもの人格の成長にわらべうたが寄与していることが豊富な実例によって示された。さらに榎田は、「遊ぶ中で歌う喜びを知り、音楽の基礎である聴感や拍感、内的聴感が育つこと、わらべうたが「あらゆる音楽に通じる基礎と社会性」を養うこと、「自立して歌う喜び」と「仲間と声を合わせて歌う感動」が子どもの心に深く刻まれることを主張した。蓮見は、わらべうたが内的表象（イメージ）の形成に寄与し、「学習者」としての基盤を育てることから、わらべうたが保育内容として不可欠であることを論じた。ハンガリーのわらべうたの指導場面（デイトリヒ・ヘルガ）の映像を分析し、一人一人の耳元でささやく、目やしぐさでさりげなく合図を送るなど、指導の個別化を図りつつ、発達段階に即した効果的な指導を行っていることを明らかにした。それはわらべうたの指導において指導者の音楽的・教育学の専門性を要することも意味していた。尾見は、音楽に固有の能力が、そのみがめざされるのではなく、人格の諸側面の発達に繋がるように課業が意図され、計画され、継続的に行われることを可能にする教材は、わらべうた遊びにおいて他にないのではないかと主張した。ヘルガの指導事例を詳細に分析することで、保育内容としてのわらべうたへの着目がいかに卓見であるかが見えてきた。

（4）保育者を対象とする、全 3 回のわらべうたの講習会（6～7 月）は、映像解説と実技

講習（榎田・篠崎）・合唱（尾見）・特別講義（汐見稔幸氏「うたうことの人間学」）・関連講義〔①わらべうたの成り立ち（尾見）②諸外国のわらべうた（永岡）③わらべうたが育む音楽性（尾見）④幼小接続期の子どもの言葉とイメージの発達とわらべうた（蓮見）〕で構成した。アンケートの回答の分析から、講習会の参加によってわらべうたに対する感性がさらに高まり、わらべうたをより積極的に保育の中に取り入れていこうとする意識の変容が見られ、「わらべうたは乳児期から児童期の子どもの発達を支える」という講習会の基本姿勢が伝わったと考察された（尾見・蓮見 2016, 蓮見・尾見・永岡 2016）。8月7日に「ベテランの保育者に学ぶ～榎田先生と篠崎先生から一日たっぷりわらべうた～0歳児から5歳児の発達の流れに沿った《総集編》」を実施し、榎田・篠崎による教材と教授法のダイジェスト版（120分の編集DVD）を制作した。さらに8月27日に「うたう楽しさ・声や楽器を「合わせる」楽しさ—わらべうたを歌う・合唱で歌う・日本の楽器とともに歌う—」（企画・講師：尾見）を実施した。10月に養成校の音楽教員に向けて、日本音楽教育学会においてわらべうたのワークショップを行った（講師：榎田・篠崎）。

（5）3～5歳児を対象にわらべうたを中心とした総合的な「表現」活動と、ピアノ演奏の「鑑賞」活動を定期的・継続的に提供し、両者を合わせて、幼児のための音楽の「楽習」経験を創出することを試みた結果、わらべうたを中心とする活動はどの年齢でも好まれ、能動的に参加し、聴取力、身体調整力、歌唱力等を伸ばし、人と繋がる喜びが高まっていく様子が見られた。わらべうたは幼児の音楽活動にふさわしく、その教材化・体系化・普及の意義が明らかになった。一方、継続的な音楽の鑑賞活動を通して、幼児は鑑賞への興味が育ち、ピアノ曲の味わい方を獲得していく姿が見られた。遊戯室の同一空間で「いっ

しょ」に、ピアノに触れ、ピアノの楽曲の演奏を聴き、指導者と子どもたち或いは子ども同士とのやり取りを楽しみ、鑑賞活動における「音楽の協同性」が生まれていた（尾見・長谷川：印刷中）。

5歳児と小学校第2学年を対象に「わらべうたと箏の鑑賞」の実践を行った結果、いずれも、わらべうた（「なべなべ底抜け」で遊ぶ）から箏の唱歌（シャンテン…ツルツル…シャシャコロリンツンシャン）を経て、「さくらさくら」の鑑賞へと自然な展開となった。演奏家の鮮やかな演奏に魅せられ、子どもたちは集中して鑑賞ができた。幼小接続期にわらべうたを通して日本音楽との喜ばしい出会いをもたらすことができることが示唆された（尾見 2017）。

以上、3年間の研究の結果、「協同性」という音楽の根源的な機能に着目することで、音楽教育が幼小接続の鍵になること、音楽教育における幼小接続がもたらされることを確認することができたのではないかと考える（永岡他4名 2016）。

5. 主な発表論文等

〔紀要論文〕（計7点）

①尾見敦子・長谷川恭子（印刷中）『就学までに必要な育ち』に寄与する音楽教育の実践的研究—わらべうたとピアノ鑑賞による継続的音楽活動を通して—『川村学園女子大学 子ども学研究年報』2, 査読有。

②尾見敦子（2017）「ハンガリーの幼稚園・小学校の音楽教育における伝承の歌遊びの意義」『川村学園女子大学研究紀要』28(2), pp. 67-84.

③長谷川恭子（2017）「就学前教育における鑑賞活動のありかたについて—保育園における実践の分析を通して—」『平成28年度全日本音楽教育研究会 大学部会 会誌』pp. 8-14.

④永岡都（2016）「幼児期の言語と身体の発達を促す音楽活動—幼稚園における電子テ

クノロジーの活用実践一」『学苑』908,
pp. 40-55.

⑤尾見敦子・蓮見元子 (2016)「わらべうた
講習会の企画と実施ー乳幼児期から児童期
の発達を支える観点からー」『川村学園女子
大学 子ども学研究年報』1 (1), pp. 79-87.
査読有.

⑥尾見敦子 (2015)「諸外国に見る音楽教育
における『幼小接続』ーフィンランドとハン
ガリーの事例からー」『川村学園女子大学研
究紀要』26 (2), pp. 43-62.

⑦永岡都 (2015)「フィンランドの幼児教育
における音楽教育の意義と実践ーナショナ
ル・カリキュラムと『音楽プレイスクール』
をめぐって」『学苑』896, pp. 44-63.

[学会発表] (計9件)

①尾見敦子・小川昌文・永岡都 (2014)「音楽
教育における『幼小接続』をどう考えるーア
メリカ, フィンランド, ハンガリーの現状比
較からー」日本音楽教育学会第45回大会,
聖心女子大学.

②小川昌文・尾見敦子・永岡都・阿波裕子・
井下べに・Alison M. Reynolds (2015)「世界
の音楽科学習指導要領を比較するーアメリ
カ・ハンガリー・フィンランド・ドイツでは
音楽教育をどう考えているのかー」日本音楽
教育学会第46回大会, 宮崎大学.

③永岡都・尾見敦子・小川昌文・蓮見元子・
長谷川恭子 (2016)「『幼小接続』の鍵として
の音楽教育の役割ー『音楽の協同性』に着目
して」日本音楽教育学会第47回大会, 横浜
国立大学.

④井下べに・尾見敦子 (2015)「幼小接続期
に求められる音楽表現の質を考える(2)ード
イツ, ノイス市の“Jedem Kind seine Stimme”
の事例を通してー」日本音楽表現学会第13
回大会, 沖縄県立芸術大学.

⑤尾見敦子・蓮見元子・榎田光代・篠崎純子・
永岡都 (2015)「就学までに必要な子どもの育
ちを考えるーわらべうた遊びの実践を通し

て」(自主シンポジウム) 日本乳幼児教育学
会第25回大会, 昭和女子大学.

⑥尾見敦子・永岡都・蓮見元子 (2016)「幼児
期の発達課題と教育・保育内容の再構築(2)
ー諸外国の理念と実践から音楽とその関連
領域を再考する」(自主シンポジウム) 日本
保育学会第69回大会, 東京学芸大学.

⑦尾見敦子・蓮見元子・永岡都 (2016)「就学
までに必要な子どもの育ちを支えるわらべ
うた遊び(1)ー保育者を対象とした講習会の
企画と実施」日本乳幼児教育学会第26回大
会, 神戸女子大学.

⑧蓮見元子・尾見敦子・永岡都 (2016)「就学
までに必要な子どもの育ちを支えるわらべ
うた遊び(2)ー講習会に参加した保育者の意
識の変容ー」日本乳幼児教育学会第26回大
会, 神戸女子大学.

⑨尾見敦子 (2017)「幼稚園・小学校の教育
内容としてのわらべうたの教育的意義ー音
楽家と学校・園, わらべうたと日本音楽, 幼
稚園と小学校の音楽教育を『繋ぐ』実践を通
してー」日本音楽表現学会第15回大会, 東
京音楽大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾見敦子 (OMI, Atsuko)
川村学園女子大学・教育学部・教授
研究者番号: 20185672

(2) 研究分担者

永岡都 (NAGAOKA, Miyako)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号: 10172511

小川昌文 (OGAWA, Masafumi)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号: 30177141

蓮見元子 (HASUMI, Motoko)
川村学園女子大学・文学部・教授
研究者番号: 60156304

長谷川恭子 (HASEGAWA, Kyoko)
実践女子大学・生活科学部・助教
研究者番号: 20742787

(4) 研究協力者

阿波祐子 (AWA, Yuko)
井下べに (INOSHITA, Beni)
榎田光代 (ENOKIDA, Mitsuyo)
篠崎純子 (SHINOZAKI, Junko)